
てのひら

雨式藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てのひら

【Zコード】

N8123S

【作者名】

雨式藍

【あらすじ】

書いた掌編、短編小説を JMP していきます。

図の用（複数用）

6月5日改稿

教室の窓から、枠に囲まれた世界を見ていた。頬をなでる風は生暖かく、湿っていた。

朝からテレビで、梅雨に入ったのびのびのとアナウンサーが喋っていた。

雨は、嫌いだ。

友達とけんかをした。

地面がぐしゃぐしゃで、運動場に出でられなかつたからになつたんだと、ため息混じりに呟いてみる。

「中野くん？」

同じ班の女子が、俺の顔を覗き込んで不思議そつこしていた。

「どうしたの？ 元気ないね」

俺が手に持つていいほつきて田を落とされた。俺は彼女に背を向けた。あいつがいないと、することができ無いので掃除をするしかない。

「お前は嬉しいんじゃねーの？」

いつも俺と友達は掃除の時間にほつきでちやんばらをして遊んでいた。彼女の役目は遊んでいた俺たちを注意することだつた。

「ちよっとね

くすりと笑われた。

「んだよ

彼女は手に持つていたバケツを床に置いて、しゃがみこみ、雑巾を水に浸した。

きもちい、と笑顔を俺に向ける。最近は湿度と气温で室内はむんむんしている。冷たい水はさぞ気持ちのいいことだろ。俺も雑巾にすればよかつたかなと、少しだけ後悔した。

「高崎くん、大丈夫かな？」

高崎 僕の友達はピロティで滑ってあごを打ち、切つてしまつた。原因は俺だと、高崎は俺をにらみつけながら病院へ連れられていつた。俺に悪いところがないと言い切れるわけじゃない。俺にも悪かつたところはあった。でも、高崎がまったく悪くなかつたわけじゃない。あいつにも悪かつたところはあったはずなのに。あいつは教師に俺が全て悪いんだと話して消えやがつた。俺は一人で教師の拳骨を食らつた。

別に拳骨を食らつたからムカついてるわけじゃない。

俺は、あいつが俺に何もかも押し付けて逃げやがつたことに腹が立つていた。友達なら、痛みや苦しみを分かち合ひながら生きていくはずなのに。

教師の説教も一人で聞かなきやいけないはずなのに、あいつは「高崎なんて、どうでもいいよ。南は、そんなに高崎のことが好きか？」

すこし彼女 南をからかつてみた。

南は唇をひん曲げて、頬を膨らませた。

「あんた、まだ怒つてんの？ それに、あたしはクラスメートだから心配しててるだけよ」

水に浸した雑巾を固く絞り、南は床に置いた。

俺は小さく拳を握つてうつむいた。

「別に……」

* * *

下校のチャイムが鳴つてもなんとなく帰る気になれず、じぱりく一人で本を読んでいた。

「中野お、先帰るぞ」という声が聞こえた気がしたので、適当に返事を返す。

しばらいくまうつと、文庫本の文字を眼で追う。

気がつくと、教室の時計は五時を指していた。部活動の時間だ。でも俺はとても部室に向かう気にはなれず、学生鞄をつかんで立ち上がった。

玄関に着くと、傘はひとつも無かつた。俺は傘を持ってきたはずだったのに。

誰かとつていきやがつたな。

舌打ちして玄関のドアを押した。雨はひどくなつていた。学生鞄を頭の上に乗せて、駆け出した。俺の学生服はぐしゃぐしゃになつて、体にぴつたりと張り付いてくる。

俺の家は高崎の家の三軒先である。つい高崎の家の前で足が止まつてしまつた。心の奥底に沈んでいるもやもやした気持ちをここで払つてしまおう。そう思つて、心の中で言葉を考えてから、高崎の家へと足を踏み出した。

玄関のインターフォンを鳴らすと、顎に白いガーゼを包んでいた高崎が、むすつとした顔で出てきた。

「ごめん、と口を開きかけたけれども、その言葉は俺の喉の奥でつかえて出でこなかつた。

「何？」

見下すような視線を高崎は俺に投げた。

何だよ……お前、俺んちに電話かけたの謝るためじゃなかつたのかよ。出かけた言葉を必死に押し殺して、唇を無理やり違つ形に動かそうとした。

「お前、何で俺に罪を押し付けて逃げやがつた」

しかし、上手くいかなかつた。なんだか夢でも見ているように体がふわふわして、頭がぼうつとして、口が上手く動かせない。勝手に違う言葉を紡いでしまつ。

高崎の制服の袖にはまだ、少し血がついていた。俺がつけてしまつた、血。

謝ればいいのだ、一言だけ、「『めんなさい』」と。でも、素直な気持ちになれない。胸の奥にもやもやした霧のようなものがわだかまっているせいだろうか。

「なんだよ。怪我させたんだから、そのくらい当然だわ」

そして、その言葉にいりついて、高崎の襟首をつかみそうになつた。体は必死に押さえたが、口のほうは言つことをきかない。

「誘つたのはお前だろ！？」

ピロティで無様に転んだ高崎を思い出す。俺が悪いといふもあつた。ふざけて足をかけてしまつたから。でも。

「俺だけが悪いわけじゃない」

高崎は目を眇めて俺のことを見下した。やつぱだめだ。仲直りしよつとしてきたけれど、全然できそうに無い。

「いつも、一緒に怒られてたじやねえかよ……。何で今回だけ裏切るんだよ。マジ信じらんねえ！ ありえねえし」

喉の奥から信じられないほど大きな声が出た。それを高崎は静かな声で返した。

「謝りにきたんじゃないなら帰れよ」

俺は、何しに来たんだよ。

頭の中では分かつているはずなのに、心がそつかせてくれない。怪我させて、ごめん。今度から気をつけるから、また、遊ぼう。考えてひねりだした言葉は、使われることは無かつた。

*

*

*

家に帰るとだぼだぼのジャージを着た姉貴が、ソファーに座つてテレビを見ていた。俺に気づくと、自分の隣に置いてあつたタオルを放つてよこした。

「なに、その不景気面」

「別に」

姉貴は濡れた頭にタオルを被つて、自分のびしょぬれの制服を拭いていた。心なしか不機嫌なのは、自分が濡れたからだろう。

「今日の夜何にする?」

ぶつきらぼうに訊いてきた。いつもなら何か答えるところだが、今日はそんな気分ではなかつたので無視する。

「あんたの嫌いな人参たっぷり入れてやろうか?」

皮肉たっぷりにその言葉を口にして、姉貴は俺の顔を覗き込んだ。「なによ。あたしの手料理も明日から四日間食べられないのよ? さみしくないの?」

姉貴は明日から中国へ修学旅行に行く。俺たち姉弟は一人暮らし。父親がいることはいるのだが、あちこちに転勤する職業柄、決まつた場所にいることができない。俺たちにとつて転校はできるだけ少ないほうがいい。そういうわけで俺たちだけ、この土地に残っている。

だから、時々仕送りを送つてくれるのだが、生活は基本一人で何とかする。家事も一人で分担して行つている。

「せつかくさあ、修学旅行前日で早く帰つて来れたつうのに……スカートのひだがそれちゃうじゃない」

ぶつぶつと文句を言いながらブリーツスカートのひだを直している姉貴のことは放つておいて、居間のテーブルの上のきゅうすを手に取り、給湯器のスイッチを入れた。

お湯をきゅうすに注ぐ。ほんわりとした湯気が立つた。

出がらしななつた茶つ葉がきゅうすの中で浮き、お湯が薄緑色に染まる。その様子をぼんやりと眺めていると、唐突に姉貴が話しかけてきた。

「高崎君から電話、さつきかかってきた」

高崎。

「用件は?」

自然と声が冷たくなる。姉貴は頭にかけたフェイスタオルの下か

「あんたが居ないって言つたら切つちやつたけど。ひょつとしてあら、俺を怪訝そうに見つめた。

「あんたが居ないって言つたら切つちやつたけど。ひょつとしてあんたら、喧嘩した?」

俺のぶつきらぼうな態度を見てか、それとも高崎の態度が分かりやすかつたのか。それは分からないが、こういふとき姉貴は鋭い。

「ああ、喧嘩するのはいいけど、何で?」

怪我させた、とぼそりと返すと、姉貴は苦笑を浮かべた。

そんなことで、とあきれ果てるような表情だ。

「あんたたち、ちつちやいのよ。あんたが帰つてくる前に電話かかってきたから、あ、一緒に帰つてこなかつたんだな、つて思つたら」

「あいつが全部俺に押し付けたんだよ。先公に何もかも俺のせいだつて言いつけやがつて。友達なら一緒にしかられるべきだと思つだろ?」

お茶を一口すすつた。姉貴はテレビの音量を下げた。

「どうせ、遊んで怪我したんでしょ?」

馬鹿にするような口調で言われてカッとした。

「俺裏切られたんだぞ!」

姉貴はスカートをぱんぱん、とはたいてハンガーにかけた。スカートをかけたときにジャージの袖から手首が見えた。もう半袖を着ることができないようになつてしまつた手首。

「裏切られた? あんた、そんだけで裏切られたなんて思うほど高崎君とは浅い関係だったわけ? それとも幼馴染だからなんとなく付き合つてただけ?」

姉貴はじつと俺をにらみ上げた。友達の話になると、姉貴の一言一言は、重い。姉貴は、中学のころ、いじめられていた。でも、一度も登校拒否にはならなかつた。そばに、たつた一人だけだつたけれども、信頼できる人が居たからだつた。

その人とは今でも仲がよく、親友、と呼び合つ仲になつてゐる。

「人付き合ひって、授業では教えてくれないし、ホントに難しいと思う。あたしもどうしたらいいかわからないこともあるし。答えは

分からないまんま。だけど

姉貴は言葉を継ぎ、ひとしたがそれは俺の言葉にさせられた。

俺は、唇をかんだ。

自分でも分からぬ。どうしてこんなことで喧嘩して、一人でイ

三ノ山の歌合

「友達って、一体何なんだろ? うね」

「肺實は、どう思つの、

それは、中学のときの姉貴が、必死に悩んだことだつた。姉貴は中学の女子たちと上手くなじめなかつた。もともと人付き合いが上手いほうじゃなかつた。人見知りが激しくて、初対面の人と上手く話せなかつたらしい。それが、原因だつた。

仲のいい友達と、あまり親しくない友達への態度の差は、やがて、女子たちから批判されるようになる。「中野さんってさ、人によつて態度かえるよね。ありえないし」

実際、姉貴の態度は大分違つていたらしい。本人もそれを自覚していた。でも、どうしても直せなかつた。姉貴は、その女子たちの言葉を聞いて、人と話すことが怖くなつた。

中心だった一人から散々言われるようになった。

その波はだんだん広がつて、いじめになつた。誰もとめようとした
なかつたという。姉貴は一人になつて、孤独になつて、苦しくて。
それでも、たつた一人の支え、友達を見つけた。

「そばに居てくれるだけでほつとする人、かな」

たくさんなんか居ない、俺にも、

一人しか居ないんだ。

「一人一人で友達に対する考え方つていろいろあると思う」

姉貴は静かに言った。

俺にとつての友達つて何なんだね？」

ただ遊ぶだけの友達だったわけじゃないはずなのに。喧嘩をして、崩れてしまうほどもろい関係じゃないはずだったのに、もう崩れてしまいそうだ。

「お互いの気持ちをぶつけ合えるつて、ちいさいことだ」と思つやすごく胸が痛い。喉の奥が熱い。

「それだけ、一緒に居て、自然に接する」ことができるつてことじゃん

そんなの慰めでしかない。もし、崩れてしまつたら俺、他に誰もいない。一人だ。

「俺、謝りたかったのに、あいつの顔見ると、なんかイライラしちゃつて……」

そんなことをぼそりとつぶやくと、ふつん、と姉貴は俺のほうを見上げた。

「喧嘩つてさ、ただの意地の張り合いみたいなもんだよね」

姉貴はソファーの上に足を上げて腕で抱き、ひざの上に顎を乗せた。

「本当は一人とも仲直りしたいんだよ」

その言葉はすとん、と胸の中に落ちていった。

「高崎君……」

高崎がかけた電話。一体あいつはなんと言つたのだね。どんな顔でかけたのだろう。

怒つているのだろうか。

本当は、怪我させたとか、教師にチクつたとかビックりでもなくて、俺は、あいつと仲直りしたい。

「ちょっと、寂しそうだった」

寂しい。そうか寂しい、そつかもしない。

俺の広く浅くの付き合いの中でも唯一高崎だけとは、付き合いが長くて深くて、お互いの顔色を気にすることが無く、遠慮なく話せる付き合いだった。いつも悪さしたときには一緒に怒られて、説教が終わった後に先生の顔が変だったとか、笑い飛ばして。

その高崎が、俺の相棒だった高崎が急にそばから離れて、俺一人をいきにえに逃げて、俺は、隣に居るあいつが居ないことが寂しかったんだ。

そのとき、電話が鳴った。俺はしがみつくなにして受話器をとり、耳に当てるた。

『中野?』

受話器の向こうの声を聞いたとき、俺の口は自然とある言葉を口にした。

『『『じめん』』

声が重なった瞬間、口元が緩むのを抑え切れなかつた。姉貴は俺に一本指を立てて、丶サインをつくつて見せてくれた。俺は笑つて、左手で丶サインを返した。

窓から少しだけ見えた空には、うつすらと虹が架かっていた。

チューーリップとサクラ

真っ白な桜の花が校門脇の木々の枝とともに揺れている。本来なら一年前に見る筈だった景色をぼんやりと眺めながら唇を噛んだ。

周りにいる一年生はみなすべて俺よりも年下になる。みな不安そうに、だが幸せそうに、学校の中へと入つて行つた。俺はなかなか入れないままだつた。すっぽすっぽ抜ける、前を歩いていくローファーの踵に目を落としたとき、後ろから声がかかつた。

「あれ……、中野？」

声のほうを振りかえると膝上の丈でスカートを履いた少女が立つていた。

自然とまた視線が落ちる。そしてその先で見た、一年間履かれていたのであろう、少し傷がついて、少し糸がほつれかけたローファーが目に痛かつた。

「佐倉……」

「久しぶりだね」

大きな黒々とした瞳を最大限に細めた、満面の笑みだった。黒髪はさらさらで、滝のように肩に流れ落ちる。

「一年離れたんだよな」

背負つていた鞄に指をかけて、「うん」と少女は頷いた。「髪、切っちゃつたんだねー、別人みたい。でも前のほうがうち的にはタイプかなー」

歌うように言って少女は学校に向かつて歩き出す。
お前のタイプとかどうでもいいから。

俺と佐倉はただの幼馴染で、それ以上にもそれ以下にもなる気配がない。

「新しい生活の始まりですわよ」

反駁しようとしていたがそのふざけた声を聞いて一気に萎える。

下足箱まで歩いて行って一年の差を思い知る。靴箱の場所が違うのだ。佐倉は「じゃね」と軽く手を振つてくれたが振り返す気にもなれない。

どうやって自分が一つ年上であることを「まかそつか」と一つ溜息を。

溜息を吐ぐと幸せが逃げていくらしいが、そんなことを考える前に出てしまうのが溜息なのだからしうがない。

バしてしまえばやはり奇異な田で見られるだらう。そんなことはできるだけ避けたいと思っている。

平和に解決したい。

だが。

「このクラスの中野亮介君は、一つ上の先輩だが、決して特別扱いをしないように」

ケツ顎の担任はその割れた顎をそすりながら、非常によく響く声で言った。

おそらく居心地悪そうにしていた俺に対する気遣いなのだろうが、俺にとつてはそんなもの迷惑でしかない。

放つておいてほしい。

その瞬間クラス内でざわめきが波紋のよう広がり、そしてあたりを見渡し始め、最終的に俺に視線が集中した。

視線が痛くて俯いた俺に担任は歩み寄つてきて、大きな手で背中をバンバン叩くものだからたまらない。

「中野はなー偉いんだ、親御さんが」「ちょっとストップ」

近くにいた担任を手で制して睨みあげた。

「個人情報をむやみやたらと漏らさないでください」

「そんな顔するなよ……」そしてまた手が来た。別に痛くはないが非常に煩わしい。

でもここで何か言えば本当に浮いた存在になつてしまいそうなの

で我慢、我慢する。

「そういうわけでこれからよろしく頼む。さて、入学式の会場へ移動しろ。迅速にな」

入学式にはローファーで出なければいけないことになつていて。俺のローファーは一年前に履くはずだったので、少々大きくなつた俺の足には少し窮屈だった。吹奏楽部の演奏と盛大な拍手で入場するが、苦痛でしかない。

隣の女子がちらちらと俺を見る。俺が視線を投げると目を反らすか伏せる。

もし担任が何も言わなければ普通に接してくれていたのだろうか。俺が学校に通えるのが一年遅れたのは俺の母が体調を崩したからだ。俺は母と二人暮らしで何もかも母が養つてくれていたので、母が病に臥せつてからはお金がなくなつた。俺が働かなくてはいけなければいけない状況になつた。それが丁度、俺の公立高校の受験が終わつた一日後だ。だから実は、中学の卒業式にも出ることができるなかつた。

必死に俺を応援してくれていた母は、大分疲れていたのかもしれない。

きつと気が抜けてしまつたのだろう。人は、気が抜けたときに体調を崩しやすい。

俺は働き始めたが、中学生が働くといつても限界がある。バイトを一日中しなくてはいけないような状況で、学費はもちろん足りない。

だから高校に通うことができなかつた。

「中野はどうしてまた学校に通おうと思つたの？」

そんな質問が佐倉からメールで送られてきたことがある。

「学校に通つて、そんでいっぱい勉強して、医者になりたいと思つたんだ」

母が病気になつたとき、俺は本当に何もできなかつた。ただ、お

金を稼いで入院費を支払うことくらいしか。
無力だった。情けなかつた。

医者は医学という学問の力を使って人を救うことができる。そんな力を手に入れたいと思つて、もう一度高校に進学することに決めた。

校長の長い、そしてありがたいのであるう言葉を聞き流し、俺はこのまざい状況をどうすべきか考えていた。

一学年違うとなると、近寄りがなくなるだろう。しかも、俺はあまり人相のよいほうではない。

入学式が終わった後の学級活動の時間も、俺はどこか上の空だった。

休み時間にはお互に話し掛け合つて盛り上がつていてる奴らもいた。一方、俺は居心地が悪くて、人と目を合わせたくないで本を広げてひたすら字を目で追つていた。

そうしていろいろうちに、だんだんまとまりつつあるクラスの中で、俺は一人、取り残されていった。

帰りに下足箱まで行くと、見覚えのある顔の人物が立つていた。

「やつほ、やつぱ一人になつたか」

佐倉はローファーを取ろうとする俺を通せんぼする形で顔を覗き込んできた。少し不機嫌そうに見えるように顔を歪めると、佐倉は唇を尖らせた。

「中野は昔つからそんな感じだからね、きっと友達なんて作れないとは思つてたけど」

「別に作りたくないわけじやないさ。俺だって友達は欲しいと思つてるけど、誰も寄り付いてこないから」

本当に誰も寄り付いてこないと思つてるので、と息を吐き、佐倉はあきれ果てた様子になる。

「あんたさ……誰かに来てもらえるような努力をしたの？
そんなむすつとした顔じや誰も来ないでしょ」

人を避けるように、目を逸らすのもやめたら？」

そ、れ、に、と指を突きつけながら、佐倉は続ける。

「受身だからいつまでたつてもできないんだよ。もつと積極的な
なきや。黙つて友達できるなんてどんな奴？ 全く……一学年
上だから気にしてるわけ？ そんなの関係ないじゃん」

佐倉は怒ったように眉を吊り上げて、ふてくされたような顔で俺
に何かを差し出した。

思わず身を引いた俺に、「なんて奴」とまた溜息を漏らし、もう一
度それを突き出した。

「亮ちゃん、チユーリップ」

久々の「亮ちゃん」に少し戸惑つ。

「これね、卒業式で最後にもらつた花。あんたは貰えなかつたでし
ょ？ 今日お母さんから預かつたの。渡すタイミングなくつて今にな
つちやつたけどね、貰つて。お礼はお母さんに言つてね」

桃色のふつくらとした花びらを持つチユーリップ。

俺は綺麗に包装された一輪の花を佐倉から受け取つた。

「今日一日持つててさ、亮ちゃんつてチユーリップの花に似てるな
つて思つたの」

俺が、チユーリップの花に？

「他のみんなを桜にたとえたら、亮ちゃんはチユーリップだよ。友
達がたくさんいる桜は群れて咲く花。一方、チユーリップは一つに
少しあ咲かない花。どちらも綺麗な花だけど、チユーリップは一
人では仲間を増やすことすらできない、寂しい花なの。亮ちゃんは
チユーリップだから、きっと人の手を借りないと仲間が作れないと
だね。

まあ、今回は状況も状況だけどね」

「ほつといてくれよ」

首を振つた俺に佐倉は少し考えてから返した。

「あたしがチユーリップを仲間と引き合わせる人の手になつてあげ

ましょうぞ」

ふざけたような口調だった。だが佐倉らしい。

俺が何と答えたたら言い分からず黙つていたら、佐倉は俺に道を譲つた。靴を履き替え外に出る。

「人付き合いに消極的なのはもうやめるよ」

チユーリップもチユーリップなりの努力をしなければいけないと

思った。

チユーリップの花は人の手によつて群れ、そして楽しそうに風に揺れる。

佐倉は手になると言つたが、この優しい幼馴染にあまり迷惑をかけるわけにもいかない。

桜の花が風に揺れている。

俺は桜にはなれない。でも、チユーリップなりの友達を探す。

春の陽気は眠くなる。

先ほど身体が揺すられた気がしたが、天木は重い瞼を重力に逆らわずそのまま閉じさせて、睡眠を続行した。

その瞬間、後ろから肩に手が乗る。どうやら氣のせいではなかつたようだ。

「天木さん、そろそろ行かないと、巡回の時間ですよ」

「まだもう少し…………」

ぐぐもつた声で返事をすると、額に冷たい手がかけられた。

「ひや、つめた…………うあ ツ！」

小さいくせに硬い拳が振つてきて、天木は跳ね起きた。

「何するんですか！ 痛いなあ もう！」

天木が見上げたその人物は藍色の上着に藍色のタイトスカートを身に着けていた。煽るような状態で見る彼女の顔は美しいがそれよりも恐ろしさのほうが勝つている。

女は唇を吊り上げて凄絶な笑みを浮かべ、天木を見下ろした。

「人がさつきから優しく起こしてあげてるのに、あなたはいつまでも『まだ』『もう少し』を繰り返すんですもの。こっちだって仕事があるんです。それなのにあなたはさつきから寝てばっかりで、私の手を煩わせた挙句、時間過ぎても巡回に行かないと。ふざけるなよこの野郎」

女は天木のこめかみを指でがつちり挟み、齧るように押した。元は整つた目鼻立ちをした女の顔が怒りで歪む。

「それはおそらく寝ぼけてただけです。僕は覚えてませんからね！」

！ それにほら、あなたの女性なんだから、汚い言葉遣いとか、そういう顔とかやめましょうよ。せっかくの美人さんが。損しますって絶対！」

天木は情けなくおどおどしながら言葉を並べる。が、女のほうは

全く聞く耳を持たない。

「いいから早く行け馬鹿ッ！！」

天木は先ほどの一方的な暴力により乱れた藍色の制服を直しながら追い出されるようにして街へ出た。

天木はこの街の交番勤務の警察官だ。

「まったくもう、間中さんは……もつたひない人だなアもつ」

先ほどの女　　間中も同じく警察官だ。

天木は生暖かい風を受けながら巡回のルートを辿り始める。今日はどうやら少し風が強いやうだ。そろそろ散る頃になつていた桜の花が風に舞い上げられ、踊つていて。

この街は小さいがとても賑やかで、綺麗な街である。道路、公園などは地域住民のボランティアが掃除をしてくれているし、花も植えられていて華やかだ。わりと最近できた新しい街なので、公共施設や住宅などの建物はまだ綺麗であるし。なんと言つても、この街の人間は生き生きしていると思う。そんな中にいられることが、天木のわざやかな幸せでもあった。

「おはようござこますーー！」

「ああ、おはようございます」

巡回コースの一部である公園に差し掛かつたところで小学一、二年くらいの男の子に声をかけられた。彼は「おまわりさん」に憧れているらしく、天木に話しかけてくることが時々あるので顔は知つている。名前は訊いたことがないが。

その彼は、この公園の巡回らしきものをしてくれていたらしく、得意げに胸を反らせて「異常はありません」と敬礼した。

天木は苦笑しながら男の子の手を取つて降ろす。

「敬礼はね、帽子を被つてないときははしないんですよ。帽子を被つてないときはこいつ」

天木は男の子の背を押して前に倒した。いわゆる普通のお辞儀と同じ格好である。

「えー、そうなの？じゃあ俺今度、帽子被つてここ見回るね、敬礼のほうがカッコいいもん。天木さんいつもこの時間にここ来るの？」

天木は微笑を浮かべて小さく頷いた。

「いつもとは限らないけどね、まあ大体このくらいかな。毎日僕が来るわけでもないし」

「天木さんその他に来る人って、間中さんでしょ！！ あの人綺麗だよね！ 天木さんあの人と付き合つてるの？」

「そんな言葉どこで覚えたのかな、僕いくつ？」 という齧しを含む返答をしてやろうかと心の奥底で思ったものの、そんなことをしたら天木の沾券に関わる。やめておいた。警察官の中には天木に惚れ込んでいる輩がたくさんいる。男ばかりの職業のせいもあるのだろう。天木は他の男たちから代わって欲しいとせがまれることがあるが、こればかりはどうしようもない。

そんな風に人気のある間中が美しいのはその通りだが、間中と天木は釣り合わない。どう考へても無理だろう。

というよりも、天木はあの恐ろしい性格を我慢できそうにない。結婚はまだしていないが、結婚するならおしとやかな女性とがいいと思つている。

「付き合つてなんかないよ、ただの仕事仲間だから」「えーつまんないの」

天木は「じゃあね」と軽く手を振つてから歩き出した。

スーパー・マーケット前に差し掛かつたとき、白髪で腰が曲がった女性が嗚咽を漏らしながら地面に覆いかぶさるようにして何かを探しているのが目に留まつた。女の周りには鞄の中身が散らばつている。

「ちょっと、奥さん何してるんですか！」

駆け寄つて女の身体を抱き起こしてみると、彼女の顔は蒼白で、目は潤んでいた。

「財布が……財布がなくなつてしまつたんです」

「どこあたりでなくしたか覚えてらつしゃいますか？」

彼女は震える唇を開きかけて閉じ、そしてもう一度開いて声を絞り出した。

「買い物をした後なんです。多分、……」

「いくらくらい入つていたか覚えてらつしゃいますか？」

「一千円丁度です……おつりとレシートはここにありますから」

女は手を開いた。そこには確かにつり銭とレシートが乗つている。天木はズボンのポケットからメモ帳とペンを取り出して素早く書き留めた。

「どんな財布ですか？ 色やデザインなど分かりますか？」

「茶封筒に入れておりました。最近私はボケが激しくつて、財布を持つていつたらどつかに置いてきちゃうからと封筒にお金を一日分詰めてもらつておいて持つてきて買い物をするんです。今日はまだ回るところがあつたのに……」

天木は『財布』という文字に一重線をペンで引いて消し、茶封筒、と書き直した。

「とりあえずこの辺りを探してみましょ、無ければ交番まで来てください。紛失届け、場合によつては盜難届けを出していただく必要があります」

女が頷いたのを確認してから、天木は自分も封筒を探そうと思い、女を座らせて立ち上がつた。

そのとき、

「あの人、が盗みました、覚えてます！ あの人、ずっとあたしの後ろについてきました！」

スーパーから出てきた男を指差して女が叫んだ。その叫びに気づいたのか、出てきた男はこちらを向いた。

そして、天木と数秒目が合つて 逃げるようにな駆け出した。

「すいません、少しお訊きしたいことが」

天木は声音はそのままで男に向かつて走り出した。

幸運なことに、男が逃げ出した方は行き止まりになつていて。この辺の地理に疎い人間なのか。それは分からぬが、ツイている。

天木の予想通り、男は怯えた顔で戻ってきた。天木は足を止める。両腕には野菜類、カツプラーーメンなどの商品が裸の状態で抱えられている。が、何を思ったのか、天木から一、三メートルのところで商品を全て放り投げ、ポケットに手を突っ込んだ。そして抜き出した。

何を？ 鈍い光を放つ小型のナイフをだ。

「おらあああああああああツ！！！」

ナイフが迫つてくる。だが、天木は退かない。ここで退けば、代わりに誰かが刺される危険性があるからだ。

天木は、男のナイフが自分に届く十分な距離になつてから、飛び出しているナイフを持つ男の手首を手刀でぶつたたいた。ナイフが落ちたのを確認する間もなく、男の右足に自分の右足を掛ける。襟首を引っつかみ自分にひきつけ、左足を軸にして回転。男を地面に引き倒した。

自分の足元に倒れて呻いている男に、天木は変わらない明るい声色で言つた。

「署までご同行願えますか？」

携帯から電話をかけ、間中が出た。交番は間中に任せ、交番の奥のほうで仮眠をとつていた男を呼んで、逮捕した男を署まで連れて行つてもらつた。天木は女と一緒にお金の入つた茶封筒を探したが、店の周りでは見つからず、男が盗んだものの中にも入つていなかつたので、女に交番まで来てもらつことにした。

交番に戻ると、表向きの明るい顔をした間中が女を迎えた。とりあえず紛失届けを書いてもらつことにして、椅子に座らせた後、天木は一階にある奥の部屋に入り、ふう、と息を吐いた。間中の明るく優しげな声が聞こえてくる。女というものはころころ表情を変え、恐ろしい。そんなことを思いながらお茶でも飲もうと思つてボ

ットのボタンを押していると、なにやら大きな音がした。いつもはこのような音はしないので、何だろ?と思つて、窓を開けて外に身を乗り出した。原因はすぐ分かつた。鬱蒼と茂つた木の枝が窓を叩いていたのだ。風が強いので、普段は届かないはずの枝がここまで届いている。

今日は風が強い。

「もしかして」

天木は先ほど取つたメモを取り出し、眺める。封筒の中には軽いものしか入つていない。

飛ばされたのかもしれない。

いや、飛ばされなければおかしい。鞄の中身は道路に広げられたいた。万引き現行犯で逮捕された男は、女の金を盗んだかという問い合わせを否定した。それを女は疑り深く眺めていたが。もし、鞄の中にまだ金があつたのに無いと思つて鞄の中身を広げてしまつたとした

ら。

天木は階段を駆け下りて、スーパーへ向かつた。あの付近の木にもしかしたら封筒が挟まつているかもしれない。

そして、その読みは当たつた。

街路樹に突き刺さつてゐる。「すいません、はしごありますか」スーパーの店員に訊ねてはしごを借りたが、あまり上等ではなく、風が強くて揺れ、使い物にならなかつたので、結局木に登つて封筒を取つた。

封筒の中にはきちんと一千円が収まつてゐた。天木ははしごを返して急いで交番に戻つた。

「奥さんッ!! 見つかりましたよ

間中の訝しげな視線を無視し、交番に入るなり、天木は女に茶封筒を差し出した。女はきょとんとした顔でこちらを見上げてゐる。

天木はにっこりと笑つて説明した。

「犯人は風でした」

「風……？」

天木は親指を立てて、自分の後ろ 外を示した。

「！」の今日の強い風ですよ。封筒を風が奪つていったんですね。奥さんがお金が無いと思って鞄を広げたときまで、実はお金はあって、中 身を外に出したときに風に攫われていつてしまつたんですね。

「つまり、春一番が、お金を欲しがつてたつてことですかね？」

その言ひ草に少し頬を緩めて、「そつかもしれないですね」と返答。

「でも奥さん、春一番は2月から3月あたりに吹く風のことですよ。だから、そうですね……今日の風は春一番、いや、春二番あたりにしておきましょう」

ありがとう、と軽く頭を下げ、笑いながら女はお金を受け取り、交番を後にした。

すがすがしい気持ちで女を見送つて、振り返ると、間中がむくれた顔で天木を睨みつけていた。

「な、なんでしようか？」

かなり不機嫌そうな顔だ。もつ嫌になつてくる。逃げ腰で一階に上がろうとした天木に間中は、

「その解き明かし顔がムカつくんです。偉そつこ。いつからそんなに偉くなつたんですか」

「なるほど。僕が小さな事件を解決できたことをねたんでるんですね」

「うるさいッ……馬鹿の癖にッ……」

「悔しいんですね」

煽るよつこ言つた天木の言葉のあとに、拳と蹴りの嵐がきた。

ああ、今日は本当に風が強い。

縁と空（前書き）

全然お題に沿えていませんので、^{タイトル}は僕にやさしく読んでください…。
…。

誰かに向けて、何かを書くときは、赤いペンで書いたらダメよ。私は友達に向けて手紙を書いていた。赤ボールペンを握つたまま顔を上げた私に母は諭すよつと言つた。

赤は、絶交の色。

そしたら青はダメなの？ と訊ねる私に、青は悲しみの色だと教えてくれた。

そしたら縁は？ 縁は別れの色だよ。

黄色は、と訊いた所で母は表情を曇らせ、困つた顔になつて、知らぬ、と答えた。

それは、今となつても真偽の判断がつかないことだ。どうしてつて訊かれたらこいつ答える。クラスのメンバー全員で先生に、旅立つていく誰かに色紙を書こうとするとき、皆はそれぞれからフルな色ペンを手に持つて色紙を囲む。そうして出来上がつた色紙には当然色とりどりの鮮やかな文字が並ぶ。それをもらつて喜んでいる、それに自分がもらつたときに嬉しい。だから、なぜそんな色で書いてはいけないのかと疑問に思つてしまつ。

母はただ単に色ペンで手紙を書くなとこつことを言つたかつだけだつたのかもしね。でも私の心にはその言葉がしつかり染み込んでいて、それを信じてずっと手紙の宛名も、本文も黒の筆記用具を使って書いていた。色紙を書くときには、何で黒？ という冷ややかな目で見られていたけれど。

その私が、つい最近、赤いボールペンで手紙を書いた。色がどうのうのう、とかいう問題ではなく、内容が内容で、受け取つた相手をなじるよつなものだつたからだと思つ。相手は私の友達だつたが、

私と口をきかなくなってしまった。彼女は明日、引越しをする。昨日は、彼女の家でお別れパーティーが開かれたらしい。もともとは行くつもりだったが、私はつまらない意地を張つて、行かなかつた。教室では昨日彼女の家に行つたメンバーが彼女の机を囲んで、甲高い声で笑いながら騒々しいお喋りをしている。彼女はその真ん中で笑つている。私は机の上に乗せた腕に頸を押し付けて、その様子をぼんやりと眺めていた。机の心地よい冷たさを感じながら息を吐く。目を眇めてじつとしていたせいだろう。彼女を囲んでいたグループの一人が、こちらに気づいて「わ、梨奈こわ~い」と声を上げた。とたんにみんなこちらを振り返つてどつと笑い声を上げた。私は少し頬を緩ませかけたが、仏頂面で真ん中に座つている彼女を見て、表情を引き締めた。

「ねー何で梨奈来なかつたの？」

じつちに訊いてくる一人の女子に、

「ごめん、昨日急用ができちゃつて……さ。行きたかつたんだけど、ごめんね~」

へらつと笑つて返した。我ながら気持ちの悪い笑みだつたと思つ。

ああ……最悪。

「そつかあ、真理奈、昨日は楽しかつたよねえ」

引越しをする少女、真理奈のほうに向き直つて屈託なく笑う彼女に悪気はない。そういう子なのだ。分かつていて。でも今の私の心にはちくちく刺さる。草むらを歩いていくと時々あつて足にまとわりついてくるような棘のついた植物のように、鬱陶しい。

歪んだ表情を見せたくなくて、私は突つ伏した。喧嘩した原因は、自分でも信じられないことだつた。今まであの子の嫌な部分まで全部ひつくるめて大好きで、親友だつたのに、私はあの子の少し煩わしい癖が嫌になつて手紙に「やめてくれる?」と書き連ねた。煩わしい癖、あの子は喋り方が少しぶりつ子つぼくなるところがある。それはわざとではないと分かつていて。それから、書き物をしていと、書いている内容が自然と口に出てきて、うるさい。一緒に勉

強していると煩わしい。それから、

そんなことを全て手紙の中に赤ボールペンで並べた。絶対傷ついた。だって真理奈はもろって広げたときに傷ついたような顔を、したから。

どうしてか分からない。勢いで書いてしまった。どうしてあんな気持ちになつたんだろう。どうしてこんなときに。どうして私は意地を張つてゐる。仲直りしたいよ。でも今更元の状態に戻ることなんて。できない。できない。でもしたい。じゃあやつてみればいい。無理だよ。だって怖いんだもん。あの子になんて言われるか。優しい真理奈に何て言われるか分かんないから。何か言られて、立ち直れなかつたら怖いから。

さよならつて言いたいのに。

そしたら言えいい。でも言えないのでしょ私は臆病者。

時間が戻つたら。

時間が戻るなんてことはなく、止まるなんてこともなく、真理奈の引越しの日が来た。

青色の絵の具を絵筆で延ばしたかのような真つ青な空になぜか苛苛して、私は学校から出された課題も手につかず、鉛筆を次々に折つていた。鉛筆はいとも簡単に折れる。悲しいくらいに。外を見て、空がどうしても視界に入つた。

いい引越し日和。

いい見送り日和。

見送りに行きたいけれどどんな顔で行けば良いのか全く分からない。分からぬ自分に腹が立つて、それを考えさせる美しい空にも腹が立つ。

こういうときは私の気持ちを映したような大雨とか、嵐になるのが普通じゃないの。小説ではそうだ。そういう表現がある。

この正反対の空は何。

理不尽な怒りを鉛筆にぶつけていたら、一本の鉛筆が足の小指く

らこの長さになつたので次の鉛筆を出そうとした。が、もうさすがになかつた。私は私が出した手紙の、真理奈からの返事を出して眺めた。眺めても気持ちが治まるわけもない。手紙を机に叩きつけるようにひっくり返して文面を隠した。そのとき、薄くて小さい文字が目に入った。最初に読んだときには気持ちが落ち着かなくて気がつかなかつたらしい。

「返事待つてます。引越しの日まで」

私は鉛筆を取つた。手紙を書こうと思つた。ポストにでも入れておけば顔を合わせなくて済むと思つた。そして、鉛筆で書きかけたとき、母の昔の言葉を思い出した。

「緑は、別れの色」

私は呟いて、緑色のペンを取つた。書き始めようとして、気づいた。もし、仲直りできたなら、これは別れじゃない。でももし失敗したら、別れになる。

私は青い空の「写真」が背景にうつすらと印刷されている便箋を取り出した。よく考えてみれば、これはよく私の心を映している。「青は悲しみの色」だから。文面は黒のボールペンで、そして、緑のボールペンで四つ葉のクローバーの絵を描いた。もし、これが別れの手紙になつたときに麻里奈が幸せになるようこと願つたために。そして、勿論ほんの少しの別れの意味もある。

文面だけでなく、便箋で、

「別れは悲しいよ」

と伝えようと思つた。きっと伝わらない。でも、やらないと後悔するだらうから、こうした。

私は折つた鉛筆をそのままにして家を飛び出した。行き先は、勿論麻里奈の家だ。

鈍色の鉄の棒は少しも傾くことなく、そして曲がることなくまっすぐ立つたまま、私の目の前に立っていた。

しとしとと降る雨が、鉄の棒を濡らし、滴となつて地面まで滑り落ちる。

「ここから、出していただけませんか」

隣に仏頂面で立つてゐる飼育員を見上げて、強い聲音を叩きつける。飼育員は口を開こうともしなかつた。うんざりする。息を吐き出しながら、何かよく分からぬ物質で造られた壁に背中を押しつけた。

私は、檻の中についた。

外には、私と同じ「人間」とは思えないような派手で奇妙な色の皮膚をした者や、一、二、三メートルを超えるような長身の者が列を作つていて、私を覗き込んだり何か機械をこちらに向けてボタンを押したりしてゐる。透明で丸い、レンズらしきものが見えたのでおそらく写真をとつてゐるのだろうと推測。まとわりつくような視線を避けるために私は檻の奥にある暗陰に隠れる。そうしてみると、緑色の皮膚と白目のないこれもまた緑の目を持つ一メートルほどの長身の飼育員が、檻に入ってきた。そいつはわざとらしく溜息を吐いて私を睨みつけてくる。いつもだ。だから暗陰に隠れるのも考え方なのだ。

私はここに来て、動物園の動物の気持ちが初めて分かつた気がした。

私が連れてこられたのは、おそらく地球の暦で三ヶ月くらい前だらう。一日の長さがどうやら違うような気がするので地面に毎日刻み付ける線もあてにならない。私は「地球という星の人間」という生き物として、この星の動物園に入れられていた。どうして私なの

か分からず毎日苛々。食事は野菜らしきものを生で与えられるときはまだ良いほうで、茶色いかたまりみたいなものを無理やり口に突っ込まれることもあるし、檻の中だつて汚い。飼育員が不眞面目でなかなか綺麗にしてくれないので。毎日同じ服を着せられ、シャワーも浴びることができず、その代わりに頭から冷水を掛けられる。三ヶ月前まで地球で普通の生活　いや、今なら恵まれた生活だと思える　をしていた私にとつては相当な苦痛だつた。私の生活を壊したのは、おそらく地球外生命体、つまり宇宙人であるこいつら。どうしてそう判断したかというと、空飛ぶ円盤に乗せられてきたから。そんなおかしな話があるわけないと今まで思つていた。が、おそらく、これがUFOというやつなのだろう。そして、ここに住む生き物は人とは思えない肌の色をしているが、二足歩行をし、人間とよく似た形で、しかも喋つたり読み書きしたりすることができる。人間と同じように脳が発達した生物だと思う。宇宙人と言つていいだろ。奴らは、普通の高校生活を送つていた私の幸せな生活を奪い去つた。部活動を終えて高校から帰宅する私に襲い掛かり、そして連れ去つたのだ。有無を言わさない強引な手口だつた。

私は人間として扱つて貰えなかつた。だが、三ヶ月前までは一人居た。

たつた一人。

初めて会つたのは私がここに来てこここの暦で三日目の、初めての雨の日だつた。この星でも雨が降るのかとぼんやり眺めていると、私はいつの間にかびつしょり濡れていた。私の檻には屋根がないので濡れるのは当然だ。隠れられるところはあるが、飼育員に睨まれると癪なので、食べ終わつた餌の皿を頭から被つて何とか凌いでいると、例の飼育員に奪い取られた。何か言つたが言葉が分からないので首を傾げるしかない。せめて身体の水滴を拭きとるタオルでも与えられないかなと期待したが、無駄だつた。シャワー代わりの冷水をかけられるときは貰えるのに。私はすでに生野菜についた菌で

お腹を壊しかけていた。これで風邪でもひいたら大変だと、緑色の飼育員が去つた後、何とか雨を凌ぐ方法を考えるために頭を巡らせた。

「ここでの生活はさぞ苦しかろうね」

私は耳を疑つた。耳慣れないわけの分からぬ言語の中に、一つだけ聞き取れる言葉があつたからだ。地球の言葉で、しかも日本語だつた。思わず銀色の柵のほうを見たが、肌色の皮膚は見えない。あまりの苦しさに幻聴でも聴いたのかと思つてしまふなりしなきやと心の中で呟く。

「ここだよ」

もう一度聞こえた。そしてもう一度振り返つて肌色の皮膚を発見した。手のひらだけ肌色だつた。あとは真つ青な皮膚をした人だつた。体格が地球の人間と同じだったので、私は同じ地球人であると判断し、そちらに這つていつて柵にすがりついた。そして、小さな声で訊ねた。

「地球人ですか？」

「しかも日本人でした」

おどけるように言つたその人は手のひらを全身を覆つ漆黒のコートの中に隠した。青色に見えた皮膚は、近くで見ると何かで綺麗に塗られているだけだつた。

「地球人が来たつて聞いたから来てみたらこんなに可愛らしい女子高生が連れてこられてたなんて、全く、腹が立つてしようがないよ」

その人は眉をひそめてはいたが口調は淡々としていた。落ち着いた低い声の男の人だ。

「はい」

唐突に何かが目の前に突き出された。小さな箱と、柔らかいタオルだつた。箱には何か書かれていたが何が書いてあるのか読めなかつた。ここに言葉のようだ。なかなか受け取らない私に、彼は頬を緩めて、笑つた。久々に見た、地球の人間の笑顔だつた。

「なあに、毒なんか仕込んじやしないよ。お腹の薬と、タオル、使いたいな。お腹痛いだろ？ 寒いだろ？」

別にそのようなことを口走った覚えはないのに、その人は私の今の現在の悩みを見事に当ててみせた。私は驚いて、逆に神経質になつてしまつ。

「どうしてそんなことが分かるんですか？」

「分かるからさ」

私が箱とタオルを受け取るとその人は踵を返して行つてしまつた。それと同時に、飼育員が掃除道具を持って檻の中に入つてきた。私はそばの植え込みにタオルと箱を隠して、いつものように隅のほうにつづくまつた。このときばかりはこの縁の飼育員が仕事熱心でなくてよかつたと心底から思つた。隅々まで掃除をしたりしないため、植え込みの中に隠したタオルと薬箱は見つからずに済んだのだ。掃除が終わつて飼育員が去つて行つたのを確認してから、私はスカートのポケットに薬箱を忍び込ませて奥の岩陰に入つた。水はないので唾で錠剤を飲み下した。あの人は何も説明をしていかなかつたので、とりあえず一錠飲んだ。薬箱のパッケージにはおそらく使用法が書いてあるのだろうが私はこの星の言葉は読めない。

また男の人来たのは雨の日で、私が来てからこここの暦で六日目だつた。その日も彼は手のひらの肌色を見せて私に合図をした。私は自然に見えるように気をつけながら、その人のそばへ寄る。

「薬は一日何回、何錠飲んだ？」

口を開くなり、焦つたような聲音で彼は行つた。「いや、こないだは説明抜きで帰つちまつたからや……」とそのあとに付け足す。

「一日三回、一錠ずつ食後に飲みました」

その答えを聞いて安心したように、ほつと息を吐いてその人はまた薬を差し出した。

「使つてくれ。ここでもらえるやつはあてにならないからな。前やつた分は俺が持つて帰るからよこせ。それで話があるんだが……」

私が植え込みに見物客から見えないように薬とタオルを隠すと、彼は眉間に皺を寄せて呻つた。私は植え込みの中から、汚れたタオ

ルと薬を出して彼に手渡す。

「ここから逃げ出したいとは思わないか…… といふか、一緒に逃げないか？」

「思います」

答えは自然と口から零れおちた。男は、檻に手をかけ、私を睨みあげる格好になつてぼそぼそと言つた。

「こここの奴らは地球の人間を見せ物にしてる。とくに、お前は逃がしてくれないだろうな。女子高生だ。あいつら『地球の日本の女子高生』大好きでな。なんてつたつて可愛いからだそうだ。だが、その可愛い子もこんな風に檻の中に閉じ込められたら台無しだな。せつかくの制服も汚れちまつて……洗濯とかもしてくれないだろ？私は泥汚れの目立つ白いセーラーに目を落とした。ひどいにおいがする。だがにおいを消す方法がない。

「仮にもこつちはここに来てやつてるんですよ。こんな扱い受けるの、おかしくないですか？ あ、私がブスだからか。」

彼は私の偉そうな物言いに少し口角を上げた。

「あいつらは檻の中の俺たちの気持ちが分からぬんだ。分からうともしない」

「あの……どうして私に親切してくれるんですか？」

視線を上げた彼の眼光に思わず身体を引いた。彼は檻をひつつかんで狼のように呻つた。

「聞いてどうする」

「どうもしません。ただ知りたいだけ」

彼の檻を掴んだ指に力がこもつたのが分かつた。

「教えてください」

頑なな言い方だつた。今思えば、あれは彼の意地だつたのかもしない。私に、馬鹿にされると思つたのかもしがれない。そんなことしないのに。

彼が去つたあと一度のタイミングで飼育員が入ってきた。

それから雨の度に彼は足を運んでくれた。たつた一人の地球人に私は次第に心を許すようになった。彼が来るのは、飼育員が餌を出してから、掃除道具を取りに行くまでの短い時間だった。飼育員が戻ってくると逃げるように帰っていく。少しずつ、いろいろな話をした。ここから逃げ出す壮大な計画の話。地球にいた頃の話。ここがどういうところかという話。そして、その中でこの星では雨が三日に一度降るということを聞いた。つまり、彼は三日に一度この檻にやつてくれるということだった。彼が来てくれる日は、心なしか気分が軽かった。名前も年齢も分からぬ、地球の日本人の男は、律儀に三日に一度やつてきた。休んだ日はなかつた。「どうして雨の日にだけ来るんですか?」と一度だけ訊ねたことがある。「雨の日なら雨の音にかき消されて会話が聞こえないからだ。お前には悪いけど大雨だとなおいい」答えはこうだつた。彼と三日に一度のお喋りタイムで、いろんなことを話して、いろんなことを訊いた。とても楽しい時間だつた。ただ一つ、訊けないことがあつた。それは、どうして彼が青色に右手のひら以外の全身を塗りたくつているのかということだ。奇妙な色の中で、肌色が浮くからか、と予想はしたが、訊けなかつた。自分でもどうしてか分からぬが、訊けなかつた。その謎はすぐに解けた。

「今日、計画を実行する」

計画とは地球に帰る計画のことだ。UFOを使うだの、ロケットに乗つて帰るだの言い争つた三日後だつた。どちらも非現実的で、とても実行できそつになく、一人で笑い飛ばしていたのに。妙に格好つけた彼がおかしくて忍び笑いを漏らすと、「笑うな」と睨まれた。彼は大まじめだつた。それがおかしくてまた笑つた。

「できるんですか」「できる」

根拠もないだろうに力強く彼は頷いた。地球に戻れなくとも、せめてこの檻から出ることができればと思い、私は小さく頷いた。

彼は漆黒の帳が落ちた頃に現れた。ひつそりと静まり返った夜の動物園の雰囲気を壊さない、静かな登場だった。私もその彼になら、すぐ出られるように檻の入り口付近に寄る。夜になると、飼育員が私を檻の中のまたその檻の中に押し込むので、一つ扉を開けないと外には出られない。彼は自分の上着から針金を取り出してピッキングを始めた。

音はかすかだった、はずだ。

が、突然カラフルな宇宙人の飼育員が現れた。彼は振り返ったが、逃げるのは間に合わなかつた。後ろからがつちり固められ、身動きが取れなくなつてしまつたのだ。踵を相手の足の甲にねじ込み、反抗するも無駄だった。

彼は私の前に檻の中にいた人間だったらしい。それが分かつたのは、そのときだつた。

飼育員の一人が彼をがんじがらめにし、もう一人が彼の手のひらを確認して、何か叫んだ。すると太いロープを持った飼育員が走つてきた。

あの青色は、きっと飼育員の田をこまかすために塗つていたのだ。そして飼育員が来ると逃げるように行くのも、飼育員に見つからないうつにするためだつたのだ。

縄で縛られるときに、足掻きながら彼は叫んだ。飼育員のわけの分からぬ言葉の中に混じる、私の知つてゐる言葉が悲しかつた。

「また俺をあの檻の中に入れれるのか」

いつも落ち着いていた声が少しだけ震えていた。怯えていたのか、それとも悲しんでいたのか分からぬ。

飼育員たちはその声を無視した。私はやめてと叫んだ。何度も叫んだ。十回叫んだ。檻を握り締めて百回叫んだ。

だが伝わるはずもない。あいつらに私たちの言葉なんて届かない。だってあいつらは理解しようとしている。私たちの言葉を、心を。彼は舌を噛み切つて死んだ。檻の中に入ることより、死を選んだ。

その日も雨だった。私と彼の心を表すかのような、車軸を流すかのような雨が、地面を強く叩いていた。

私は今日も雨を見る。楽しかったはずの一日に一度の雨が、いまではもう、あのときの彼の声を思い出させるものでしかない。私は柵を握り締めて、遠くを眺める。この柵を越えてもこの星から出られないことは分かっている。それに、私が逃げたらその代わりに、次のこの艦の住人が地球から連れてこられる。そしたら私はまたこの艦に来よう。の人みたいに。病氣で弱って死ぬよりは有りもない希望にすがって誰かを助ける努力をしてから死ぬほうがよっぽど幸せに思えた。

ねえ、あなたもそうだったんですね。

口の中に入つてくるし�ょっぱい雨を嚥下して、いもしない相手に問いかける。

思に出（おもいで）

テーマは初夏と情熱。

思い出

私は運動がとことんできなかつた。何のスポーツをしても周りの人たちに迷惑をかけるばかりで、いつも肩身の狭い思いをしてきた。

今から三年と少し前くらいのことだらうか。私は中学校の下駄箱前に置かれた木製の箱の前でまだ、入部届けを出す勇気が出せずにいた。私の入部届けには陸上部、と書いてある。その日は最終日だつたし、字はボールペンで書いてあつたので今更他の部に変えられるというわけではない。だが三年間の中学校生活を決めると言つても過言ではない大切な部活動だ。迷う。見学には一度だけ行つた。友達に誘われたのだ。気の小さい私はそれ以降、見学に行つていな。もつと他の部活も見ておけばよかつたのだろうが、私は練習中の先輩たちに「見学いいですか」と声を掛けることができないほど小心者だつた。誘い合つて入れる友達もいないし。

結局、私は陸上部、と書いたままその紙を箱の中に落とした。

初めて部活に行つたのは入部届けを出して3日目くらいのときだつた。先輩たちは親しみやすい明るい人たちばかりだつたし、優しかつた。でも私は自分から話しかけることもできなくて、その上に同級生と馴染むこともできなかつた。よく、試合の日にああ一人ぼつちだと一人で嘆いて、学校で場所取りしていたブルーシートの上にうずくまた。誰も相手にしてくれないとかそんな悲劇のお姫さまぶつてみたりした。私は短距離に入つたのだが、それでも練習はきつい。夏休みにはきつい練習のあとでみんなでカレーを作つたりした。本当に楽しかつたのかはよく分からぬ。愛想笑いばかり浮かべていた気がする。

部活はきついばかりだつた。だが、やめる勇気が私には欠けていた。だから、もやもやした気持ちを抱えたまま、一年生になつた。

一年生になると、仲のよい友達がようやくできて、後輩もできて、きつい練習をようやく耐えられるようになつた。私は弱いから、一緒に頑張る仲間がないと走れない。そんな仲間たちと、朝の自主練をはじめた。朝早く起きることなんてみんながいないとできなかつた。私は半ば意地みたいな感じで必死に練習した。私は賞なんてとれないからとにかく自己ベストを目指してひたすら。どんなに遅い奴でも速くはなりたいんだ。でもどんなに練習しても私は遅かつた。後輩たちにも抜かれて、悔しいというよりも情けなく思えた。でも、一つだけ、私には特技があった。陸上競技に役に立つもの。それは、声。

私は内気でインドア派のくせにいらないくらい声が大きかつた。だから掛け声をかけたりするときもよく響いていた。

三年生になつて中総体の時期が近づいてきた。中総体の前後は梅雨にかかるので雨が多くなる。たしか、一年生のときの中総体も雨だつた。私たちにとつて最後の中総体。走りこみの時期を終えた中総体2日前、私は足を怪我した。リレーの練習のときだつた。

いつものように「行きまーす」「はーい」の掛け声の後、私は次の走者にバトンを渡すべく、全力疾走した。リレーの練習のときは本番にバトンがあわなくなることを防ぐために全力で走らなくてはいけない。そして、スピードが出てきたそのとき、目の前を黄色のテニスボールが転がつていった。思わず声を上げて、私が咄嗟に取つた行動は止まることだつた。後で思えば飛び越えて進むこともできたのかもしれない。だが、私はそんなことを考える余裕がなかつた。止まつたときに、右の太ももに痛みが走つた。陸上を始めてから、最初で最後の怪我だつた。

ボールはテニス部のものだつた。私たちの中学校の運動場は放課後になると、サッカー、ハンド、野球、テニス、そして陸上の多くの部活でごつた返す。陸上部はどうしても球技系の部活の周りを走らなければいけなくなるので、ボールが飛んでくることは多い。ジ

ヨグの途中にサッカーボールが飛んできたり、スタートの練習をしていたらハンドボールが飛んできたりといった具合だ。殊に、テニスボールは小さくて多いので拾つのが間に合わず、放置されたままのことがよくあり、陸上部員はその大量のボールをどけてから走るのが常だった。危ないとは思つていたが、まさか自分がなるとは思つていなかつた。

最後だからといふことを言い訳にし、病院にはいかなかつた。中総体後に行くと「軽い肉離れですね」と言われた。よく走れたものだと思う。私は200mと100mと4×100mRに出場した。200mは大失敗で、悔しくてぼろぼろ泣きながら走つたが、100mは自分のシーズンベストが出せた。問題は、四人で走るリレーだけで、しかもこれが一番最後だつた。

もしかしたら走れなくなるかもしれないからと、アップは少なめにして、本番にかけた。幸い、私は第一走者だつたのでバトンあわせは少なくてすんだ。

赤いターダン眺めていた。夏になると、これがやけどするくらいに熱くなつたんだつけ、と心の中で呟く。夏の暑い中できつい練習をして、そしたら、先生がかき氷を買ってきてくれて、それをみんなで食べた。冬は、雪が口の中に入るのも気にせず、エンドレスリレーをした。あり得ないとかみんなで喚きながら。きつかったけどまだ覚えてる。きつい練習ほどよく頭に残つてゐる。楽しいことは忘れてしまつのに。人間の記憶力は残酷だな、と思つて目を伏せる。これで最後だ。

学校名が呼ばれて、バトンを上げてお辞儀をした。三年間で染み付いた一連の動作もこれで最後。

「位置について、よーい」

雷管の音が響いた。押して押して押して　コーチが言つていたことを思い出し、地面を押す。押す。押した分だけ、赤いターダンは押し返してくれる。ターダンを走るのは気持ちがいい。早くなつ

た気がする　だけだけど。カーブを身体を内側に傾けて、走つて、最後だ。なのに。

第一走者が走り出した。私と一緒に練習してくれた子だ。彼女がいなければ私は走れなかつた。その子の背中が遠くなる。緑の三角が見えた。このままじゃバトンゾーンを出る。

「待つて！！」

止まつてくれた。彼女の手にバトンを押し付ける。

「ごめんなさい。私はやつぱり最後まで迷惑かけました。

やつぱり運動なんてできなかつた。荒い息のままターダンにへたり込みそうになつたが、膝に手をついて踏みどどまる。その後のリレーは見ることができなかつた。視界がぼやけて、見えなかつた。私はふらふらとテーピングを外しに向かつた。最後の中総体に使つたテーピングはいつもの寂しい白ではなく、カラフルな色ペンでメンバーの名前と学校名が書かれ、飾られた特別仕様だつた。

私の任務が一つ、残つていた。それは、連呼の音頭を取ることだ。ようやく涙を拭いた私は、いつも連呼をする場所に向かつた。私の声はいつもより大きくなる。自分の悔しさも込められて。私ができることはこれだけだから。

一つ、そうなつて気づいたことがある。先輩たちには声が裏返るほど必死に応援する人がいた。それは、自分たちも悔しい思いをしたからなんじやないだろうかと、最後の最後になつて思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8123s/>

てのひら

2011年7月19日03時22分発行